

児童養護施設等における
被虐待児や障害児への
アートを通じた自立支援活動

アーティスト・ワークショップの記録・事業紹介

お問い合わせ / **NPO法人 芸術家と子どもたち**

〒170-0004 東京都豊島区北大塚1-15-10 東部区民事務所2階

TEL 03-5961-5737 FAX 03-5961-5738

HP <http://www.children-art.net> Mail mail@children-art.net

※公益財団法人三菱財団の助成を受けて事業を実施、本誌を作成しました。

特定非営利活動法人 **芸術家と子どもたち**

アーティストによる ワークショップとは？

ダンスや演劇、音楽などの分野で活動するプロの現代アーティストが、都内の児童養護施設等に出向き、各施設の担当職員との意思疎通を重視しながら年間10日間程度のワークショップを実施します。コンサートや演劇鑑賞ではなく、子どもたち自身が活動し、体験する取り組みです。最終日に、子どもたちのパフォーマンスを発表する場を設けることもあります。

- ジャンル** ダンス・演劇・音楽・美術等
- 実施日数** 8～10日間程度
- 実施時間** 1回(1日)あたり1～2時間程度
- 実施場所** 集会室、多目的室や体育館など施設内のスペース
- 発表の機会** 子どもたちの様子や職員の方の希望を元に、場合によっては成果発表的なパフォーマンスを検討
- 費用** 施設側の財政面での負担は基本的にございません

◆アーティスト・ワークショップの実施の流れ

実施施設ヒアリング

事務局コーディネーターが施設を訪ね、対象となる子どもたちの実態や人数、実施日数や事業に期待すること、希望内容(ジャンル、スケジュール、発表のイメージ)など個別のニーズを伺います。その後、施設の個別ニーズに応じたアーティストを事務局で選定します。

事前打合せ (ワークショップ内容の検討)

施設職員とアーティスト、事務局コーディネーターで打合せを設けます。参加児童に関して配慮すべきこと等も共有しながら、実施内容を検討します。本事業を必要とする子どもたちが参加しやすいよう、職員の意向を尊重しながら実施日程も調整します。

ワークショップの実施と振り返り

事務局コーディネーター立会いのもと、アーティストによるワークショップを実施。各回終了後に振り返りや次回に向けた打合せを設け、子どもたちの変化なども共有しながらその施設ならではのワークショップにしていきます。場合によっては、最終日に成果発表的なパフォーマンスの場を設けることを検討します。

児童養護施設と「芸術家と子どもたち」

「NPO法人芸術家と子どもたち」では、2000年より、公立の小・中学校(特別支援学級含む)などで、アーティストと先生が協力しながらワークショップ型授業を実施する活動を行っています。現代アーティストとの出会いの中で、子どもたちが自発的な表現活動を介して他者と関わり、自己肯定感や自尊感情を向上させ、豊かなコミュニケーションが育まれるなどの有用性を周知し、教育現場での事業の普及・発展に努めてきました。

さらに、2010年度からは、都内の児童養護施設等でも同様の取り組みを開始し、福祉分野でも、自立につながる多様な体験を育むワークショップの可能性を開拓し、実践を積み重ねています。

実施にあたっては、職員の方々と連携して、一人ひとりの子どもの興味・関心や心の状態に応じて、身体表現や音楽、美術、演劇など多様な方法で自己表現を楽しめる場を丁寧にコーディネートします。一人ひとりに寄り添いながら、「自分が自分であって良い」と認められ安心して主体的に表現することを楽しめる場をつくります。他者と関わり合いながら、ものの見方や考え方の多様性を認め合う経験を重ねることが、子どもたちの可能性を伸ばし、自立の基礎となる生きる喜びにつながることを願っています。

2015年12月～2016年7月には、「公益財団法人 三菱財団」の助成を受けて、下記の都内3施設で本事業を実施しました。

実施データ

施設名	学年	参加人数	日数	時間	作品タイトル/発表の機会	アーティスト
二葉むさしが丘学園 (児童養護施設)	小学1～ 中学2年生	9人	11日間	各回1.5時間	『カラフルごちゃまぜカーニバル』 (職員や施設内の子どもたちに向けて発表)	楠原 竜也 (振付家・ダンサー)

■概要 2016年1～6月まで、月2回程度のペースでワークショップを実施

■内容 カーニバルをテーマに、身体表現をベースに取り組みました。誰かと身体をふれあったまま動いたり、目線を合わせたまま跳つてみたり、人と関わることで生まれる動きの面白さを体験しました。また、活動の中には、手づくりタイコの演奏や、衣装や仮面をつくる時間も設けて、ものづくりが好きな子どもたちの気持ちも盛り上げていきました。最終日には、ドラムの生演奏で15分程度のパフォーマンス作品を発表しました。

赤十字子供の家 (児童養護施設)	4歳～ 小学2年生	(前)12人 (後)11人	10日間	各回1時間	タイトルなし (職員や施設内の子どもたちに向けて発表)	新井 英夫 (体奏家・ ダンスアーティスト)
---------------------	--------------	------------------	------	-------	--------------------------------	------------------------------

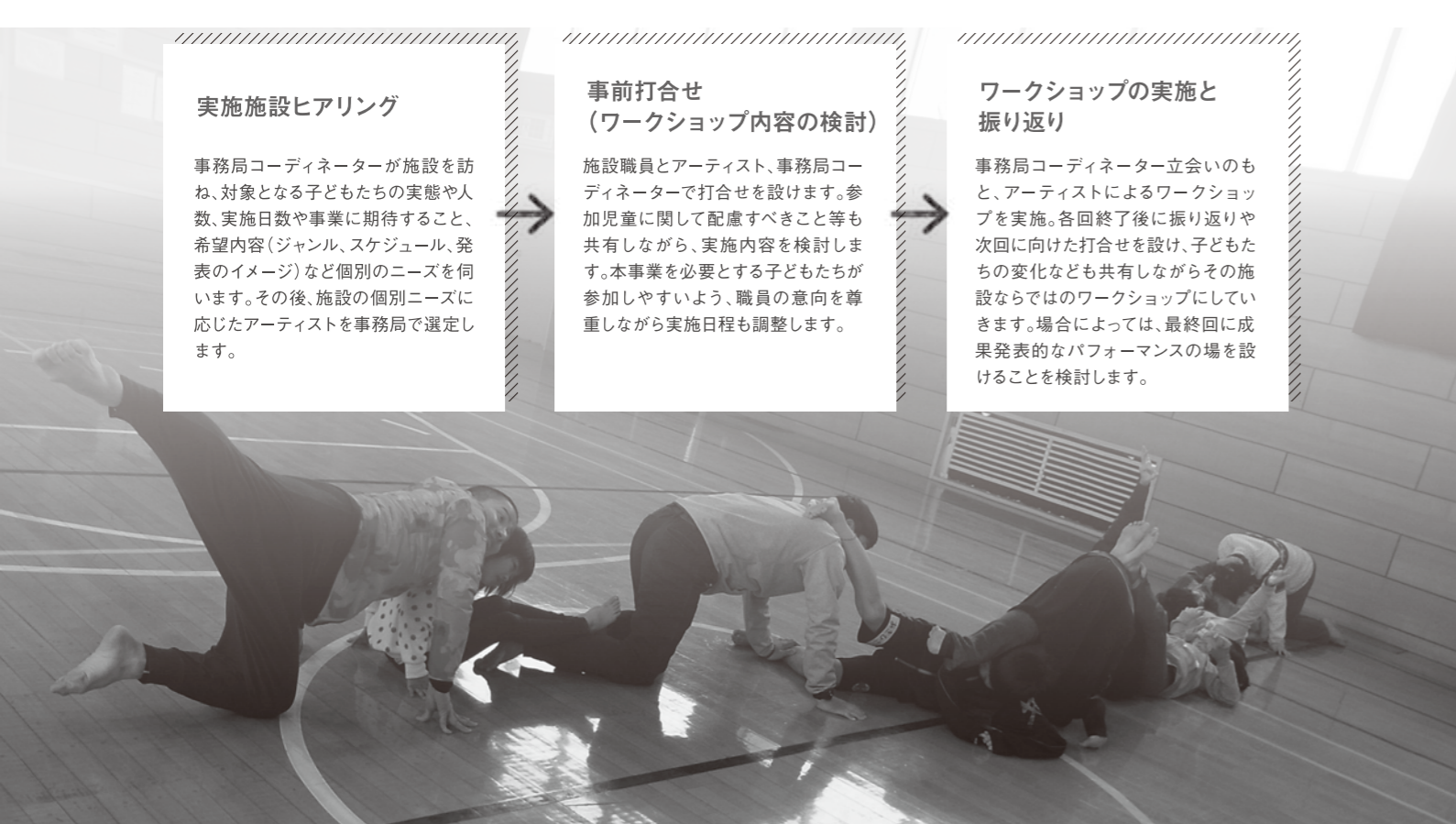
■概要 2015年12月～2016年7月((前):12～3月、(後)4～7月)まで、月1～2回程度のペースでワークショップを実施

■内容 様々な楽器や身体あそびを通して、友だち同士の心地良いふれあいや、協働することの楽しさを体感していきました。タイコの音に合わせて、二人組で手をつなぎながらポーズを決めたり、わらべ歌に合わせて、友だちのつくったトンネルをくぐってみたり、大人と子どもと一緒に遊びながら、子どもたちの表現を引き出していきました。子どもたちの創造力や集中力がぐんぐん伸びていき、最終日には、これまでの活動を作品仕立てに構成して、発表会を行いました。

友愛学園 (障害児入所施設)	小学5～ 高校3年生	20人	8日間	各グループ 各回1.5時間	『からだを奏でることから』 (保護者や職員、施設内の子どもたちに向けて発表)	新井 英夫 (体奏家・ ダンスアーティスト)
-------------------	---------------	-----	-----	------------------	---	------------------------------

■概要 2016年3～7月まで、月1～2回程度のペースで、10人前後の2グループに分けて実施。

■内容 身体を使ってどんな表現ができるか、子どもたちのアイデアや好きな事を取り入れながら探っていきました。言葉を使わずにタイコの音で挨拶をすることや、お互いの背中をマッサージして身体と心を徐々にほぐしていきながら、子どもたちとの関係性も深めていきました。中庭の植物を使ったオリジナルのTシャツをつったり、沖繩のリズムに乗せて即興で踊ったり楽器を演奏したり、美術や音楽など、身体からいろいろな表現が広がりました。



どんなことを やってるの？

ワークショップを実施したアーティストに聞きました



TATSUYA KUSUHARA



身体のどこか一部をくっつけてポーズ！

相手の目を見て感じて動く

楠原 竜也 さん

〔振付家・ダンサー〕

全11回のワークショップ。小学1～中学2年生までの幅広い年齢層の参加となりました。それだけ大変だということなのですが、年齢の低い子どもたちが賑やかに活動を引っ張ってってくれました。最後に発表会をすることが決まっていたので、発表会へ向け、子どもたちと一緒にどんなことができるのかを考えながら、コミュニケーションダンスを作品の中につなげていきたいという構想がありました。また、長期スパンでの関わりになるので、ゆっくりと関係性をつくって、彼らの中からできることを引き出していきたいとも思っていました。初回の顔合わせの時から、発表会のテーマも目に見える形であったほうが、飽きないで最後まで関わってくれと考え、僕からの提案として「カーニバル」をテーマにしたいことを子どもたちに伝えました。イメージした映像を観て、すごく盛り上がってくれて、仮面や衣装も自分たちで考えてつくろう！楽器もやりたい！と、みんなはワクワクする気持ちでスタートしました。ワークショップの内容は身体を動かして表現することが中心です。いわゆる振付のあるダンスのイメージとは大きく違います。例えば向かい合って目を合わせ、相手の動きや間合いを感じ取りながら一緒に動いていく、というような感じです。ドラムの音に合わせて体を動かしてみたり、自分たちで小さな楽器を使ったりすることもあります。コミュニケーションを取りながら身体の表現もします。そうして、そこから出てきた面白い表現を作品の中に反映させていきます。ワークショップ4回目くらいまでは表現を楽しんだり、仮面づくりの時間もあったり、

■プロフィール

玉川大学文学部芸術学科演劇専攻卒業。2002年「APE」を結成・主宰。「多くの方にHAPPYを届ける」をテーマに、国籍・年齢・性別を問わず、多くの人々に楽しんでもらえる作品を創作、国内外で公演を行う。2005年よりテレーサ・ルドヴィコ（イタリア）演出「雪の女王」、「にんぎょひめ」、「旅とあいつとお姫さま」に出演し、俳優としても活動する。近年、幼児から一般の方へのワークショップや、学校等へのアウトリーチも積極的に取り組み、表現活動と教育活動を同時に実現することを目指している。法政大学、女子美術大学、玉川大学、国立音楽大学非常勤講師。2008年、文化庁新進芸術家海外留学研修員として半年間イタリアにて研修。

こんなことをしています

ドラムの音に合わせて踊る

好きな紙を選んでオリジナル仮面づくり

仮面や衣装を身に付けて発表会！



HIDEO ARAI

新井 英夫 さん

〔体奏家・ダンスアーティスト〕

今回二か所でワークショップをしました。そのうち、障害児入所施設では、障害の程度や年齢により各10人前後の2グループに分けて実施しました。中高生が中心で、比較的障害が軽度のグループは、「即興」の表現を中心に取り組んでもらいました。具体的には、既成の音に合わせて決まった振付を踊るダンスではなく、最小のルールだけ決めて、後は自分の感じのままに相手との関係の中から即興で表現を創っていきました。楽器が得意な子もいたので、音楽も彼らに即興で奏でてもらうことになりました。即興はプロの表現者でも簡単なことではありませんが、知識や経験やスキルの多寡に関わらず「その人そのもの」が直感的に反映されます。だからこそ彼らにやって欲しい！でもダンスや音楽といえば、テレビを通して流れてくるジャンルをイメージしていた彼らに「即興」が受け入れられてもらえるか？と心配していましたが、案外すんなり乗ってくれました。そして予想以上にみんな上手だった(笑)。言葉に依らない、意味から自由に感じたままでも良い、正解が一つではない…、そんな前提がどんどん共有されてから、彼らから出てくる表現は、じんわりと深みとやさしさを増していきました。十代でこんな世界観が出てくるんだ！と。この深みとやさしさは彼らの抱える「生きづらさ」の裏返しなのかもしれませんが…。セッションを重ねて、障害の有無とか、指導する側される側という境界は、次第に溶けて無くなっていきました。最後の軽度グループの発表会では、なんだか同じダンスカンパニーやバンドのメンバーのように彼らが頼もしい「仲間」だと思えました。もう一方の、小学生も交えた比較的障害の重度のグループは、年齢の幅が広く、言葉でのコミュニケーションが難しい子たちが大半で、交流のきっかけを掴むのに時間がかかりました。最初は目も合わせてくれなかつたり途中で退出していた子も、回数を重ねることで、私たちとの信頼関係ができてきました。気をつけたのは、「その子が気に入ったこと得意なことを発見し毎回繰り返す」と「そこに新しいことを少しずつ積み上げていく」ということ。だんだんと、小さな表情や反応から私たちが読み取れることが増えていきました。

■プロフィール

幼少から落語に親しむ。町中での大道芸パフォーマンス・十五夜野外劇などユニークな劇団活動を主宰、のち独学でダンスに。まち・人・自然をつなぐことを一貫したテーマに活動を行っている。野口体操を創始者野口三千三氏から学び、「お手本は自然界」という「力を抜くからだ観」に深い影響を受ける。1997年より国内外でのダンス活動を本格開始。音楽家や美術家との国際共同制作も多数。公演活動との両輪として、障壁のある方・乳幼児～高齢者の方で幅広い対象に向けた「からだからダンスを発見する」ワークショップを展開中。国立音楽大学にて非常勤講師。

こんなことをしています

足を伸ばして身体ほぐし

中庭の葉っぱでオリジナルTシャツづくり！

毛糸をさわらないようギリギリで動いてみる



ひじから相手の動きを感じてやわらかく動かしてみよう

相手の身体にふれないポーズやぐり方を考える



そして子どもたちそれぞれが非常に豊かな内面の世界を持っていること、おちゃめだったりイタズラ好きだったりクリエイティブだったり…ということが分かってきたんです。最後の発表会は、二人組でタイコを互いに鳴らし合う対話型ダンスや一人の足踏みに合わせてタイコを叩くソロダンスなどワークショップの中で発見した各々の「お気に入り」で構成しました。「見る・見られる」という非日常のハレの関係性の中で、普段接している職員の方々の予想を大きく越えた豊かな表現が多く見られました。表現の豊かさは量ではないことにも改めて気づかされました。もう一か所は、児童養護施設で、4～6歳の幼児を主な対象としてワークショップを行いました。全10回の実施で、特別に支援が必要な子どもは少数でしたが、始めの数回は、幼児さんたちの持っている爆発的なエネルギーに圧倒されっぱなしでした。制御不能！想定外のカオス！だったのです。幼い年齢にして抱えている「離別の悲しみ」が別の形でマグマの様に噴出してたのかもしれない。まず子どもたちのエネルギーを受け容れ発散させた上で、相手と協働して表現する楽しさを少しずつ積み上げていきました。集団の活動では自分をうまく出せない子もいたので、ワークショップ前や後の隙間の時間帯に、そんな子どもたちとは個々に接する機会も意識して設けました。最終日ドキドキの発表会、子どもたちが自主的に舞台上や袖での振る舞いを確認して、みんなで「楽しく、かっこいい」舞台になるように考えて工夫してくれていました。子どもが生きるための「根拠のない自信」を一緒におおらかに築き上げること、今回の関わりの中で大切にしていたところです。一人の人として「からだ」と「こころ」がつながって感情を素直に出せること、相手に認められたり相手を認めたりすること。そんなコミュニケーションの土台になる体験がこの子どもたちと積み重ねられたのではないかと思います。(談)

どんなことが おこってる？



ワークショップに関わった
職員の方々の
感想を聞きました

“活動の中には、「君らしい」というメッセージが
盛り込まれており、本当の意味で
「受け入れる」という環境が提供されています。”

二葉むさしが丘学園 自立支援コーディネーター 鈴木 章浩さん

Q1 ワークショップ実施の全体的な感想、所感

児童養護施設に入所してくる心に傷を負った子どもたちは、見た目には、他者と何ら変わりなく見え、「心の傷」は見えません。しかし実情について、マイナス面だけを考えてみると、以下のことが挙げられます。①自己肯定感の低さ②成功体験、認められる体験の少なさ③自己表現の抑圧④対人関係をつくることへのマイナスイメージ④「大切にされた感」を持たない⑤学力が低い⑥コミュニケーションが苦手⑦未来思考、展望が抱けない等。更には、社会的養護の下にある子どもたちの自立を阻むものとして、①出会いがマイナスから始まっている(望んで今の場所にいる訳ではない)②自己肯定感が持てない(生まれてきて良かったと思えない人生)が挙げられます。自立の前提となるものの例として、「自分は無条件に愛される存在である」「自分を必要としている他者がいる」「自分の存在には意味がある」「自分は生まれてきて良かった」等の感情を持つことが必要不可欠になります。これは全て子どもたちの責任ではなく、生まれてきた環境によるものだとされています。このような子どもたちへの支援として私たち児童養護施設職員は、子どもたちを「認める」という方法でアプローチをしていくことが求められています。しかし、実際に生活の場面では難

しいことが多いということも事実です。一方、このワークショップの場では、見事にそれができているのです。①自己肯定感、自己表現の向上(自由な表現が許される場、自分の表現に対して肯定的な評価が得られる、定期的に用意される自分の空間、言葉ではなく表現を介しての他者との関わり方であり、抵抗感が出にくい等)②ソーシャルスキルの獲得(他者へ譲る、他者の表現に目を向ける、静かに話を聞く、モデルを見て模倣する等)が挙げられます。また、身体感覚を中心にした遊びの中で身体を大切にすることを学ぶ機会が得られます。あるいは、すぐにできること、上手にできることなどを求められてはならず、自分で考え、自分で行動する力を養う機会となります。活動の中には、「君らしい」というメッセージが盛り込まれており、本当の意味で「受け入れる」という環境が提供されています。今までとは全く違うアプローチであり、児童福祉だけの集団の中に別の専門家(芸術家)が介入する意義を感じています。「皆よりできない」から始まった子どもたちが、楽しさ、身体の動かし方を体感し、自信が持てる場となり、自分たちの居場所ともなりました。

Q2 ワークショップ実施中や実施後に、子どもたち・職員の方にどんな変化が起きたと思いますか？ 具体的な事例があれば教えてください。

前述したようにワークショップに参加した子どもたちは、知らず知らずのうちに、体験しながら、必要なスキルを身に付けています。厳しい実情を持つ子どもたちへ高度な要求をしなければならない私たち職員は、改めて対人援助としてとても重要な「主体性の保障」(①ありのままの相手を「認める」②相手が決断するまで「待つ」③相手の決断を「尊重する」④相手が失敗から学ぶことを「保障する」)を学び直す機会を得ることができました。このワークショップが「結果として、こうである」と言えるのであり、最初から自立支援につながるものであると考えていた訳ではありません。退所前の高齢児への支援、退所者への支援で行き詰っていた部分にヒントを与えてくれたのが、このワークショップでした。自立支援とは基本的な生活習慣の習得や就学支援、就労支援だけを意味するものではありません。自立を年齢、能力に応じて最大限実現できるよう支援することです。その中には、日常の自立支援と並行し、言葉で

は伝えられないこともたくさんあります。このワークショップには、自立の基礎となる「支え、支えられることで他者への共感を知る」ことがふんだんに盛り込まれています。音楽、ダンス、造形等々、ジャンルは違っても、芸術家による児童養護へのアプローチ、児童福祉と芸術とのコラボレーションは、実現します。このワークショップの成果を披露する際、日常の支援をしている担当職員も観ます。日常では見ることのできない子どもたちの真剣な表情、頑張っている姿を目の当たりにし、終わった後は、感動を表現しています。それは、心に傷を負って入所してきた子どもたちが、日々の支援をしている職員たちへ感動を与えている瞬間と言えます。子どもたちへの支援に停滞は許されません。このような機会を得ながら、本当に必要な支援とは何か？を考える際、新たな視点を私たちは得ることができました。

Q3 今後も実施するなら、施設や子どもたちにとって、どんな変化やメリットがあると思いますか？

1997年の児童福祉法改正で児童養護施設の施策の目的が「収容・保護」から「自立支援」に変わりました。2011年の東京都による「児童養護施設等退所者へのアンケート調査」結果では、退所後に困ったこととして「孤立感・孤独感」が最も多い回答でした。この調査結果を無視してはいけなと思います。次に多かった回答が「経済的問題」です。人間関係の喪失と経済的貧困が重なった時、大きな危機に遭遇すると言われてます。私たちは、子どもたちに「自立」を強いることで「孤立」させてしまうという結果を招いています。児童の権利に関する条約の31条に「…文化的な生活及び芸術に自由に参加する権利…」[…文化的及び芸術的な活動…平等な機会の提供…]とあります。子どもたちには芸術に参加する権利があり、私たちは、その機

会を提供する責任があります。私たちには、今後、ワークショップに参加した子どもたちの変化やメリットを見ることは困難なことかもしれません。すぐに効果が目に見えるように現れるものではないかもしれませんが、しかし、先人たちは言っています。「『生きる』ということ」「人々の間にある」ということは同義語である、「[実りを見てはいけぬ]」、「根、茎を育まなければ花は咲かず、実も結ばぬ」と。私たちは、先人たちの残してくれた言葉を信じ、人間を信じ、子どもたちが咲かせる花を想像しながら、「孤立の種」を育たないようにし、一生懸命「自立の種」を蒔くことに専念しなければならないと考えています。

二葉むさしが丘学園

家庭支援専門相談員 川口 亜衣さん



“子どもたちの“あそび”の考え方を
変えることができたように思います。”

子どもたちにとっての影響や効果

ワークショップを通して子どもたちの“あそび”の考え方を変えることができたように思います。子どもたちとワークショップでのルールを確認している際に、ワークショップは勉強なので真面目に取り組まなければならないと子どもたちが捉えている事が分かりました。そんな中で、ワークショップは“あそび”であるということ芸術家の楠原さんから話していただいたことで、“あそび=ゲーム(例えばテレビゲーム等)”と考えていた子どもたちが、身体を使ったり、頭で考えたり自由に動いて創造していくことも“あそび”であるということを知り、その中でこれから生活を送っていく上で必要になる社会スキルを獲得していく基盤になったのではないかと思います。

職員にとっての影響や効果

月に1~2回行われるワークショップでの内容を子どもの担当職員へ伝え、その日行ったワークショップについて話をしてもらうようにしていました。その中で子どもたちは“アイコンタクト(目と目を合わせたまま身体を動かす)”をよくやっていたようで、生活の中でアイコンタクトを活用できるようになった子もいました。職員と目と目を合わせて行動するという事で、子どもがイライラしている時に落ち着くために視線を合わせて深呼吸をする等の行動が取りやすくなったということも挙げられました。

赤十字子供の家

自立支援コーディネーター 大野 由花さん



“時々我を忘れて“一緒に楽しむ”ことだって
必要なんだと感ずることができたと思います。”

子どもたちにとっての影響や効果

もともと自由な表現が苦手な子は、戸惑ったり逸脱する様子も見られながらも、回数を重ねる中で、色々な変化が見られました。やはり“あそび”を通じて感覚・行動調整していくことや、日頃は何かと怒られがちである子が、ワークショップの中では中心になり、“良い注目”を沢山浴びることで、自己効力感を回復する非常に良い機会であったと思います。また、職員と一対一で心地良い関わりを持ったり、子ども同士でつながることの心地良さも味わえたようです。日常の中でも、ワークショップの中でやった“あそび”を子どもたちが思い出して、主体的に遊ぶ姿もちらほら見られました。

職員にとっての影響や効果

子どもの支援は、正しいことを伝えるだけでなく、時々我を忘れて“一緒に楽しむ”ことだって必要なんだと感ずることができたと思います。また、その時参加する職員によって、子どもの違う一面が見られたり、その都度コミュニケーションを取る大切さも改めて感ずることができました。成果や評価は、数字として表れるものではないですが、やはり継続し、回数を重ねることでの変化は明らかだったと思います。子どもたちの活き活きとした表情を見て、職員も関わり方のヒントや、良い刺激を子どもたちからプレゼントしてもらったように思います。

友愛学園

副施設長 石川 淳さん



“とても貴重な、そして子どもたちの様子に
驚きの連続であった活動でした。”

子どもたちにとっての影響や効果

比較的、障害の重い児童たちが前面に出て発表をする、という経験の機会は、子どもたちにとっても、私ども職員にとってもとても貴重な、そして子どもたちの様子に驚きの連続であった活動でした。始めは、内容が理解できずに不安になり、自分の部屋に戻りたくなったり、飛び出して行った子もいましたが、新井さんを始めとする皆様の上手な関わり合いの中で、次第に楽しい、そして心地良いと感じる時間になり、最後には創造性溢れる素敵な発表となりました。軽度の子供たちは、日々の生活の中でも、「失敗したらどうしよう」や「なんか言われちゃうかも」など私たちにとっては何気ない一言や行動が負担になったりしながら生活しています。このワークショップを通しては、自分を表現する活動は、誰に否定されることもなく、責められることもなく、表現発表することは、自己肯定感を高める意味でもとても良い場になったことと思います。

職員にとっての影響や効果

普段、自己表現することが上手でない子どもが、ワークショップでは活き活きと自分の感じるままに表現をしている姿が見え、本人たちが持つ潜在的な能力やこれまで見たことの無い創造性にふれられたことは、職員として今後における子どもたちへの日常的な支援や自立に向けての取り組みへのヒントが、たくさん見つけれれる場となりました。